增今大水

鏡鏡鏡鏡

校註

日本文學大系

第十二卷

大正十五年五月二十五日印刷
大正十五年五月二十八日發行

（非賣品）

日本文學大系
第十二卷

編輯兼發行者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
右代表者　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　中塚榮次郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市麴町區內幸町一丁目六番地　國民圖書株式會社
電話銀座七八三番
二一八八番
振替東京五二二九八番

解題

水鏡

文學博士　尾上八郎

物語が極盛の時期に達すると、内容も形式も、大體に於いて一定したので、こゝにまづ内容の變化を求めることが、平安朝末期から生じた。これによつて、それに從事するものは、趣向を考へ、局面を擴げて、一新機軸を出し、世人の視聽を新たにしようと努力した。この苦心焦慮の結果として遂に、不自然な非人情的な幾多の作品があらはれた。しかし、この苦心も焦慮も徒勞に屬するかの如く考へられたので、作者達は、更に一轉機を企てねばならなかつた。こゝに於いて想到せられたものは、事實の物語化であつた。

藤原氏は、初めは自己の勢力を打ち堅めるべく、他氏の排斥を敢へてしたが、それが確立して來ると、おのづから、同族の個々が、互に他を陷擠するに到つた。これは、寧ろ自然な事で、外

患がなければ、内憂がおのづから生ずるものである。この同族相互の排擠も、更にその中に、英邁な、俊秀な人が出づれば、他はその人に壓迫せられて、こゝに統一が完全に出來上るものである。藤原氏に於いて、この事をなし遂げたものは道長である。道長は、種々の幸運に惠まれた上に、自己の勝れた天分を十分に發揮して、自流以外の流を抑制して再び擡頭せしめず、權力を自分の手にすつかり掌握して、こゝに出來るだけの榮華、即ち竝びなく、量りない榮華をした。その一流の子女は、皆その餘澤を蒙つて、花やかな耀かしさを以て、時に暗雲は低迷するが、大體春の日の煦々として輝りわたる空の下に、思ふ事のない生活をした。この道長及び一流の生活振りは、從來の物語の系統を趁うて、趣向を變換し、局面の打開を試みようとした人にとつては、好個の資料とならざるを得なかつた。即ち、徒らに苦心し、焦慮するよりは、眼前の事實のかゞやかしさを、その儘に描いても、立派な作品が出來るのに氣が付いた。況んや、それに多少の想像を加へ、粉飾を添へて理想化すれば、一層の好結果を得るのに想到した。こゝに於いて、從來の物語の筆を以て、この事實の描寫に努力するに到つた。勿論、以前の物語も、事實を根據とはしたのであるが、それは彼と是とを混じ、過去と現在とを混合し、漢と和とを混じて、事實であると共に想像であり、架空であると同時に實歴であつて、その混交錯雜の間に、多大の興趣を湧

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

かしめたものである。然るに、こゝに現はれたものは、現實に卽したもの、想像に乏しいもの、作爲の少ないものであるのが異なつてゐる。此の如くにして、始めて、事實化の物語が出來上つたのである。このものが、以前から漢文でのみ書き續けられ、しかも、表面的の事實のみを傳へて來て、更にその編述も久しく中止せられてゐた國史の後を次ぐこととなつたのである。

事實の物語化の先をなしたものは、榮華物語と大鏡とである。兩者ともに、道長の榮華を直寫することを目的とした。前者は編年體で、事件の、時の流に從つて進行する儘に寫し、後者は紀事本末體で、事實の全部を眺めた上で、その發生し、曲折し、休止し、終結する狀態を詳かにした。この兩體は共に成功に近い好結果を示してゐて、わが國に、初めて出來た假名文の國史の光輝を永遠に傳へた。從つて、これの追隨者も生ぜざるを得なかつた。それは、さま〴〵の類似した名を以て現はれたが、この率先者を越え得るものはなかつた。而して、その間に、兩體の系統はおのづから錯綜して來た。卽ち、一方は榮華物語の如く他方は大鏡の如く、構想と、組織と、その重きを孰れに置いたか分明ならざるものを生じた。故に、論者は、或は榮華物語の系統と斷じ、或は大鏡の摸倣と評する等、一致しないものもあるに到つた。更にまた、以前の假作物語の分子を多量に混じて、その重要な人物を、さながら物語中の主人公の如く描寫したものさへも出

來た。これらの名の主なものは、水鏡であり、今鏡であり、而して增鏡である。

水鏡は、大鏡をすぐに承けたものである。大鏡が、從來の物語の範疇を脫卻して一新紀元を開き、一世の喝采を博したのに憧憬して、その後を襲ふべく、努力して編述したものである。大鏡の內容は、文德天皇から後三條天皇の記事までに限られてゐる。その以前の時代、乃ち、神代から仁明天皇までの事實はない。これを列記して、假名文の國史を完うせんとしたものが本書である。神代の事實は邈漠として繹ねるに困難である。故に極めて畧記した。神武天皇からは、從來の國史の記事が、やゝ詳かであるので、段々に精しく書いて行く。奈良朝に入ると、その度がいよいよ加はる。而して、作者の目に觸れ、耳に入りながら、國史に明記のない傳說もあるので、それらを集めて記載して來た。この故に、敍述は一層精細になつて行く。而して、大鏡の記載の初めの文德天皇の本紀に接續すべく、仁明天皇に到つて筆を擱いてゐる。

以上の內容の前提として、作者は、まづ浪漫的な、怪異に滿ちた、しかし、崇高の氣分のある舞臺を現出せしめた。卽ち作者は、まづ七十三になる尼を點出する。この尼は、三十三歲をも過ぎ難いやうに相人などが云つたので、龍蓋寺は、厄を轉じ給ふといふ事を聞いて參詣し初めた。それは愼みの年每の二月の初午の日であつた。この怠らなかつた御蔭と見えて、今まで無事に生

存してゐる。今年はまた慎みの年に當つたので、また參詣をした。これは、自分ながらをかしい事、今更何の命も惜しくはないのであるが、かくしつけると、やはりすることになつたので、また參詣して、更に初瀬寺にも轉じて來た。しかし、こゝに參つたのは、偏に後世をたすかるべき善知識にあはせたまへと、祈るためであつた。參り著いたのは、黄昏の頃であつた。あまり苦しいので休息してゐると、初夜の鐘が鳴る。驚いて、佛の御前に參つて通夜をしてゐる。世の中はすつかり靜まつて來た。と傍に三十四五ばかりの修行者の、經を尊く讀む聲が耳に入つて來る。ゆかしい心持がして「いかなる人の何處より參り給へるぞ。」と問ふと修行者は、「何處とも定めたる所も侍らず。少し物の心つきて後、この十餘年、世のなりまかるさまの、心とゞむべくも見え侍らねば、人まねに、もし後世や助かるとて、かやうに迷ひ歩き侍るなり。」と答へる。かれこれ問答してゐる中に、後夜も過ぎる。「修行して歩かれた物語をなさい。目もさましませう。」と尼が云ふと、修行者は、「別の事もありませんでした。一昨年の秋、葛城で淺ましい事に逢ひました。」と云つて、巨細の物語をする。

あさましい物語の初めは、かうである。一昨年の秋の九月上の十日頃、葛城に誦經してゐると月の入方の時、谷の方から來る人の氣はひがある。恐ろしく思ひながら猶誦經してゐると、眼前

に翁の姿が現はれた。藤の皮を衣とし、竹の杖をついて、瘠せて神さびてゐた。「御經が尊いから來た。」といふ。仙人といふ者がこれであらうと思つて、又一部讀むと、老人は喜んで、「修行する人は多いが、眞に、佛道に心をかけられると見えるのが尊い。何故に出家せられたか、」といふ。「今の世が厭はしくつて。」と答へると、老人は、「世は、今も昔も憂いものだ。今は惡いが、昔はよかつたと思ふのは間違つてゐる。すべて、三界は皆厭ふべきものだ。御經を承つた御禮に、すべて世は憂いものだといふ事を御知らせしたらば、一分の執心をも失つて、佛道に進まれる輔助ともなるのであらう。」といつて、神世からの事を語り聞かせた。「これを、今あなたに云ふ。」と、修行者は語り續ける。

この修行者の物語を、尼は、「この世の人の口、かねて推し量られて、かたはらいたく覺ゆれども、人のためとも思ひ侍らず。只若くよりかやうの事の心にしみならひて、行のひまにも捨て難ければ、我一人見むとて書きつけ」たので、こゝに本書が出來上つた。乃ち本書の內容は、修行者が逢つたあさましい物語の連續である。

この修行者の物語は、大鏡の作者が、同樣なもの、乃ち雲林院の菩提講の時、講師が出て來るまでの徒然に、二老人が、過去の事、現世の事を、眞寫的に、はた批評的に語るのを、一生侍が

應答する。それを聞きつゝ記載するといふ、豐かな想像の下に作り出した一說話を、この作者が摸倣しつゝ、然も、多大の變換をなしつゝ書いたものである。大鏡のも、誇張的作爲的の處が多く、自然味は缺けて居るのであるが、猶對者が尋常人であるだけ、批議や、插語や、演釋やが交雜してをり、情景が躍動して、猶大體に於いて、自然を多く離れてゐない。本書のは、特殊の舞臺を作り出して、幽奧森嚴の近づき難い境に人を導いて行つた。こゝに作者の伎倆のほども想像せられて、興味も饒かであるが、強ひて、人間味を離れしめたところに、親しみ難い何物かがあつて過去の史實に、しんみりと浸られぬ感じがする。上代史の神さびた趣には、この行き方が、或は適合してゐるかも知れぬが、猶作爲の跡の著しいのは、覆ふ事が出來ぬと思はれる。

本書の目的は、神代から仁明天皇の史實を列記して、大鏡の前を補うたのではあるが、然し、開卷の老人の語によると、「この目の前の世の有樣は、折に隨ひて、ともかくもなりまかるなり。古を褒め、今を譏るべきにあらず。」「目の前の事を昔に似ずとは、世を知らぬ人の申す事なるべし。」で、すべて、今と昔とは同樣である。ことに、「世あがりては事定まらず。かへりて、この比にあひ似たる事侍りき。」で、上代と今日とは相似てゐる。この途中には佛法が渡つた。それで人人の心がよくなつたが、また末になつて、それも失せ、世のあり樣も惡くなつたのが今である。

卽ち、古と今と同樣となつたのである。これは、「有るべき理なれば、善惡を定むべからず。」で、決して、これが、「偏にあらぬ世になるにやなど、欺き思ふべからず。」從つて、「かたおもむきに今の世をそしる心の出で來るもかつは罪に侍らむ。」と云ふのであるが、これが、作者の理想、卽ち古今一轍、過現一體の考である。作者は史實の列記をしてはゐるが、その間、地上の理想を現はさうとしてゐる。世は、時と共に墮落する。後世は澆季といふ一般的な支那思想に比して、一特色を有するのみならず、更に、公平な史眼を有してゐるものといはねばならぬ。然し、中途に、進步した考から成り立つた佛法が渡來して、人々が思想的に長足の發達をした時を以て、猶作者は、理想的の時代と認めて居るらしい。卽ち、「佛法わたり、因果辨へなどしてより、やう〳〵靜まりまかりし云々。」と述べて、この時代の讚美の語を放つて居る。然して、佛法の失せるのが、世の中の惡くなつた徵證であるとしてゐる。故に作者は、古今一轍とは云ふが、佛法渡來以前と今日と一致してゐるといふ意味で、佛法の渡來及び流行の時代は、この考の外に置いてゐる。かくの如く、作者は佛法に重きを置いて、それの消長が、國家の盛衰に大關係があると認めて居るのである。故に、事實の列記をするのにも、その方面に特に注意の眼を向けてゐる。從つて、本書は、大鏡以前の史實を補つたとともに、佛教の消長を說いたのである。上古史とともに、佛教

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

史の用をしてゐるのである。

神代の事蹟は、極めて簡單にすませて、本書の眞の記事は、神武天皇から始まつて、作者はまづ、天皇を說いて、釋迦が涅槃に入つて二百九十年に當る事を併敍する。人皇紀が初まるとともに、佛教史が初まつてゐる。孝靈天皇に到ると、作者は祇園精舍の事を述べるのを忘れない。開化天皇の條に、龍猛菩薩を云ふと共に、また同天皇及び崇神天皇の條に祇園精舍を說いてゐる。垂仁天皇の時にも、また同精舍を述べてゐる。然して、支那に佛法が渡來した事を云つて、我が國と佛法との交涉が、だん〳〵に近づく事を暗示して居る。神功皇后の御功業の大を記して、また祇園精舍の事を附記してゐる。種々の大事件があつて、繼體天皇に到ると、いよ〳〵佛法が渡來した。しかし、時人はもろこしの神と名づけたのみで、信奉するものもなかつた。欽明天皇の時に、百濟から、佛經が公然と渡つた。天皇は御信心になつたが、これに反したものには、災があつた。これと遠からずして、聖德太子が孕まれまし〳〵た。これは、金色の僧が、救世のために太子の御母の夢に入つたのであつた。敏達天皇の時に、太子が御誕生になつた。これから佛法がいよ〳〵興隆した。しかし、排佛黨も少なからずあつたので、用明天皇の時には、戰鬪さへ起つた。勝が崇佛黨に歸したので、寺院も、僧侶も多く出來る事となつた。推古天皇の時に、太子

が經を講じられた。自分は、その庭で聽聞したと、老人が云ふ。その時、三尺ばかりの蓮の花が天から降つて來た。まことに、この太子がなかつたならば、「暗きより暗きに入りて、永く佛法の名字を聞かぬ身にてぞありなまし。」で、天竺から支那へ傳はつて、三百年目に百濟に傳はり、百年あまりで、この國に傳はつたのであるが、この太子の力で初めてかくの如き盛りの花が開けたのである。太子薨後、太子とともに佛法を興した蘇我氏が倒れて、藤原氏が起つた。この藤原氏も崇佛の家で、鎌足は、蘇我氏倒滅のために、丈六の佛をも作つた。而して、この一系が御門の御後見をしてゐるのである。齊明天皇の時、維摩會が始められた。大友皇子が、天武天皇に破られまし〳〵たのも、佛も神もうけられなかつた故である。その天武天皇は、河原寺に一切經を書かせ、藥師寺をも建てさせられた。天皇の御命も、法會を行はうとの御願で、三年延びた。以後樣々の事件が起るが、佛に關するものが多い。聖武天皇の時には、大規模の佛寺建立がある。東大寺の大佛も出來かゝり、孝謙天皇の時に出來上つて、盛んな供養もあつた。淡路廢帝の時の騷擾は重大であつた。稱德天皇の時の藤原仲麿、及び僧道鏡の事件も大事であつた。この後者は、佛法の餘りに尊重せられたから起つた弊害の、恐ろしいものであつた。しかし、宇佐の八幡も、清麿に託宣して、「佛の御力を仰ぎて、御門の末を助け奉らむとす。速かに、一切經を書き、佛像

をつくり、最勝王經を讀み奉り、一つの伽藍を建てて、このあしき心ある輩を失ひ給へ、と申すべし。」と仰せられた。乃ち道鏡の奉る幣帛は詔へるものである。眞の佛の力は、それを仆すに十分である。故に、經寺を造つて、その一類を亡ぼせとの意であるから、神も全く佛に屈伏して、その威令を仰いで居られるのである。光仁天皇の時、井上の后の事のあつて後、藤原百川が、後の桓武天皇を東宮に擁立し得たのも、自分の力も勿論であるが、梵釋寺に親王の寸法にあはせて造つた梵天帝釋の御かげがおほい。桓武天皇の時にも、佛寺の造營が處々にあつた。傳敎大師が歸朝したので、天台がひろまり初めた。平城天皇のとき、弘法大師がまた歸朝したので、東寺の佛法は、これから傳播した。仲成、藥子の亂があつたが、嵯峨天皇の御位は動かなかつた。この御代に藤原氏の衰微を悲しんで、冬嗣が、山階寺に南圓堂を建てた。これから、この氏は再興して、「御門の御後見、代々におはすれども、子孫相繼ぎて、今日明日までかくおはするは、この藤氏こそはおはすめれ。」の有樣となつた。仁明天皇の時に、弘法大師の言上で、七日の御修法、また佛名も始まつた。慈覺大師も歸朝した。

以上の如く、本書には、國史の政治的事實と相竝べて、佛敎的事實が書いてある。すべて、王法と佛法とが、相關的であるといふ一種の信仰から出發して、古代史を通覽し、それを根據とし

て、種々の大事實を列記したのである。これは、その粉本たる大鏡にもあるが、主眼としたところではない、それを根柢として、一篇の假名國史を構成したのは、當時の普遍的思想に根ざしたものとはいへ、一意到底で、論理的缺陷の殆んどないのは、作者の頭腦の明晰と、筆力の雄健とを證するものである。

本書の著者の名は、明記がないこと、他の鏡類と同樣であるが、本朝書籍目錄に、「水鏡三卷中山內府抄」とあり、薩戒記にも、應永三年十一月十六日の條に、「下賜震筆水鏡一帖於予、此抄中山內大臣殿御作也。正本紛失。而今賜此御本。頗家寶也。可祕々々。」とある。これらによれば、他に反證のないかぎりは、中山內大臣の作と見るべきであらう。その中山內大臣とは、中山忠親のことである。忠親は師實の孫で、近衞天皇の久安五年に藏人となつてから、後白河、二條、高倉、安德、後鳥羽の朝に歷仕し、建久二年に內大臣となり、同五年に辭し、次いで出家し、六年に薨去した人である。

本書の名の由つて來るところは、卷末に、「大鏡の卷も、凡夫のしわざなれば、佛の大圓鏡智の鏡にはよも及び侍らじ。これももし、大鏡に思ひよそへ侍らば、そのかたち正しく見えずとも、などか、水鏡の程は侍らざらむとてなむ書き納め侍り。」とあるので明らかである。乃ち、大鏡の

如くはあるまいが、水鏡位の價はあるであらうといふ謙退の意によつて命名したものである。

上掲の、「大鏡に思ひよそへ。」とあるのでも知れるが、本書は全く大鏡を襲つて書いたものである。しかし、大鏡は、初めに天皇の本紀、次に臣下の列傳があり、終に雜事があるのであるが、本書には、たゞその一部の天皇の本紀のみがあつて、他の事は更にない。故に摸したとはいへ、その一部のみに止まつて、全體には及んでゐない。この點からのみすれば、むしろ榮華物語の編年體なのに倣つたとも云へるのである。しかし、天皇の御名を掲げ來つて、その御代々々をまとめて行つてゐるのは、大鏡の天皇の本紀そのまゝであつて、決して他ではない。

本書には、種々の異本がある。流布本の簡單と異なつて、前田家本（國史大系本）は、頗る精しい。これは、記事の精細を欲して、後增補したものか、或は、反對にそれを簡畧にして異本を作つたものか、極めて判然しないのである。單純から複雜が生ずること、方丈記の異本と流布本との關係、また平家物語と源平盛衰記との場合の如きがあるから、恐らくは、これも、流布本の後に、前田家本が出來たのであらう。

大鏡

『今やうのちごども』は、昔の攝政關白、大臣公卿といふ人々は、皆只今の入道殿下(道長)の御有樣の樣であつたと思ふであらうが、それは皆閒違つてゐる。只今の入道殿下は、『希有の幸』を有つた方で、『世に勝れ、拔け出で』てゐて、『世の中は、この殿の御光』で輝かさぬ處もない。古を尋ねてもなく、今を考へても見當らない。『二もなく、三もなく、ならびなく、はかりない』事はちやうど一乘の法の如きものである。いかなる貴人でも、始と終とそろつてめでたい事はない。魚の子は多く生まれるが、まことの魚となるものは少なく、奄羅の木は繁く花を著けるが、木の實を結ぶ事は、まことにむづかしい。今の入道殿下は、この少數中の最少數の一人である。この後にも、かほどの人は現はれまい。世がはじまつて今日まで、左大臣は三十人、右大臣は五十七人、内大臣は十二人、太政大臣は十三人ある。その中で、入道殿下程の人は一人もない。この人の世にすぐれてあられる事を、道俗男女の御前で、今から申してみよう。」と云ふのは、雲林院の菩提講で、講師がまだ出て來ぬ閒に、大宅世繼が云ひ出した語である。

この世繼と對座してゐるのは、夏山繁樹である。その傍に居る女は、繁樹の妻である。更にその傍に、生侍めいた者がゐる。あたりの羣集は、靜まりかへつて、一句も聞き落すまいと、耳を傾けてゐる。世繼は繁樹と話し合つて、「主は、今年いくつになられたか。」と云ふと、繁樹は、「い

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co